

## 調査

# 樺牟礼海軍防備隊と海軍壕

資料提供 原田 和哉

(昭和中学一年 弥生)

### 一、はじめに

戦後六十七年を経過し、各地に残る戦争遺産は次々に取り壊され一部が「負の遺産」として残されている。

私の住む佐伯市には、現在「国の登録指定文化財」(平成十三年九月指定)として興国人絹パルプ工場の一郭に掩体壕が二基残っている。他の戦争遺跡を見てみると野岡山や長島山周辺の壕、指揮所跡、防空壕なども風化し危険視されている。

海上自衛隊佐伯分遣隊の隊舎として使用されていた佐伯海軍航空隊の兵舎も解体されてしまった。

このような戦争遺跡は、当時の生活状態を知る為にも何らかの形で調査し、残されていく必要がある。

今回の調査「樺牟礼海軍防備隊と海軍壕」は、史談会会

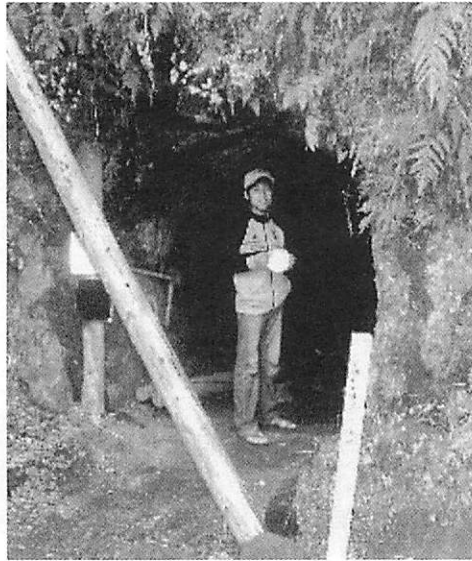
員の前田利光氏の孫、和哉君が自宅の横にある防空壕に興味を持ち、当時の弥生地区で生活していた人や海軍防備隊に勤めていた人、近所のお年寄り、戦争に参加した人たちに話を聞き、壕についてまとめたものである。

### 二、わが家の海軍壕



防空壕のある岩山 (佐伯市弥生山田内地区)

私の家の横は阿蘇凝灰岩で造られた岩山だ。  
この岩は、大昔、阿蘇の火山灰が積み重なってできたもので非常にもろい。そこに海軍壕や民間壕がある。



原田和哉君の家の海軍壕の入口

この海軍壕は、昭和十九年頃に作られはじめたものだ  
そう、土が軟らかいため、約五十センチの長さの壕が四ヶ月  
ほどで造られたという。

戦後は酒の貯蔵庫やマッシュルーム栽培の場として使  
用されていたという。

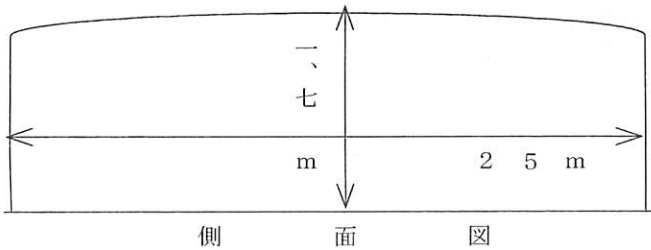
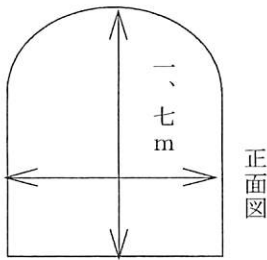
この壕の形や大きさは、次のようになっていて、正面から  
見ると食パン型のような形をしている。

地上からの高さは一、七〇メートル、横幅も一、七〇メ  
ートルある。

中は同じ幅、高さで続き中央部  
分で二手に分かれT字型をし  
ている。

まっすぐ伸びる壕は、次第に  
狭まり微妙に右側に曲がって  
いる。

現在、この壕の下の部分は掘  
下げられ深くなっている。



この壕は、佐伯海軍航空隊や防備隊が空襲にさらされはじめた昭和二十年頃から造られたそうだ。

母牟礼地区にあった青年学校に、佐伯海軍防備隊の砲術科や医療部隊が移動してきたのもその頃だそうだ。指揮は当時の少佐がしていたと言っていた。

また、石丸地区には海軍の監視哨があったそうだ。

母牟礼青年学校は、昭和十八年、現在の母牟礼住宅付近に独立校舎として建てられた。昭和十九年には学童の集団疎開や学徒動員、勤労働員が始まった。

さらに昭和二十年になり一段と空襲が激しくなると、国民学校の一年生を除いて学校の授業が閉鎖され、勤労働に従事するようになった。

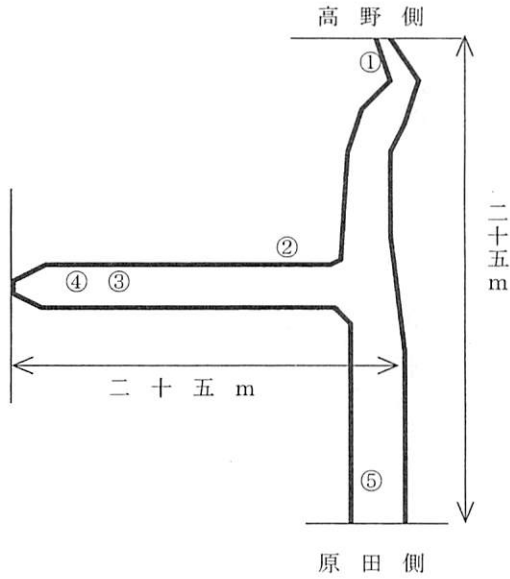
近所の人や当時この地区に住んでいた古老の話によると、この壕には海軍の司令部があり、トーチカと呼ばれていたという。

この壕の中には、司令部跡と言われる場所や、堀かけの部分、水抜き穴、カーテンの仕切り跡、電灯の跡などが残されている。

では、この壕の内部をもう少し詳しく見てみよう。



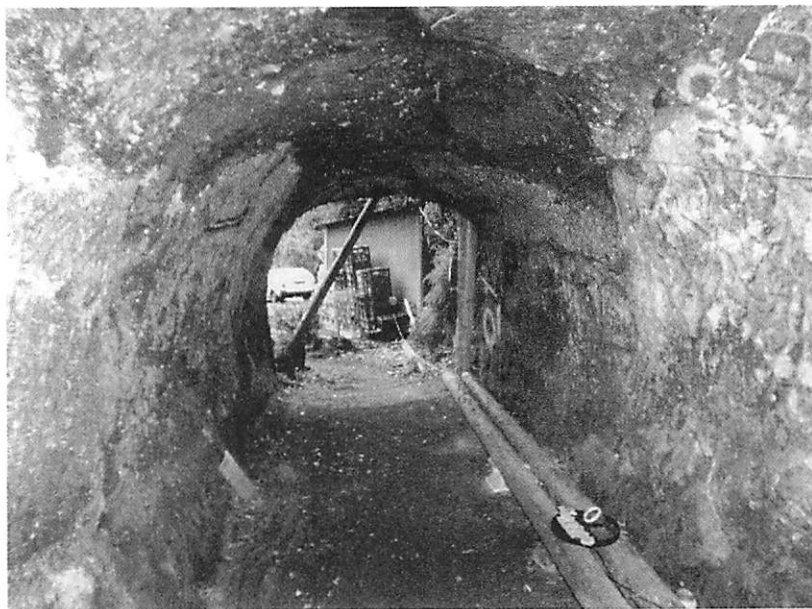
この壕を上から見ると、左図のようになる。



- ① トーチカと呼ばれていた部分
- ② 掘かけの部分 (ここに小部屋を作る計画)
- ③ カートンレール、電話線跡、水抜き跡。水抜き穴は左右の壁、天井に数カ所。長い物は二五センチ。
- ④ 司令室跡 (電灯の跡あり)
- ⑤ 発動機が置かれていた場所



突き当たりが司令部跡 (濠左手奥)



壕の中より原田邸側を見る



司令部手前の堀かけの部分と海軍使用の皿



壕の中央部を左に曲がると司令部跡と呼ばれた場所がある。この司令部跡にいたる壕は、天井が角型になっており高さは、他と同じ一、七〇メートルである。

一番奥の司令部跡と言われる所は、高く二、一メートルある。中央部が大きく窪み円形になっている。

その中央には、赤茶けた窪み（電灯が取り付けられていた跡）がある。司令部跡に向かう左壁には電話線を通す釘状のものや古びた電話線の一部が残されている。

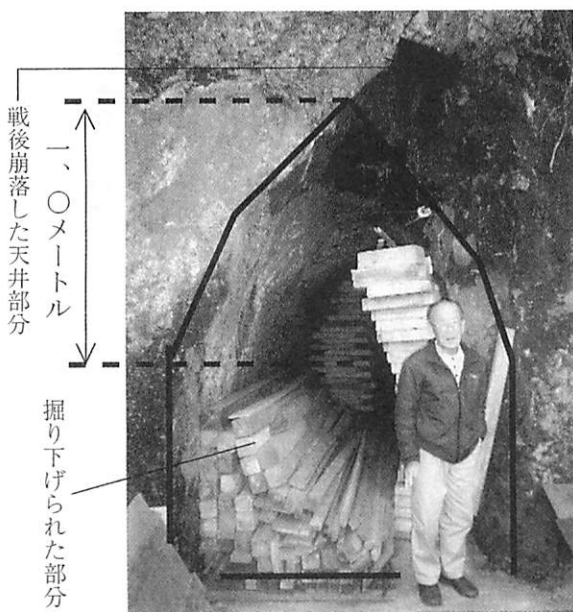
この司令部に曲がる壕の壁には白い〇印がある。当時、中に入った人の話では〇印は戦時中からあったという。

海軍航空隊の昔の建物にも、その建物の重要性等から〇、△、×の印が付けられていた。

この壕をまっすぐ抜けると、向かいの高野家の庭に続く。

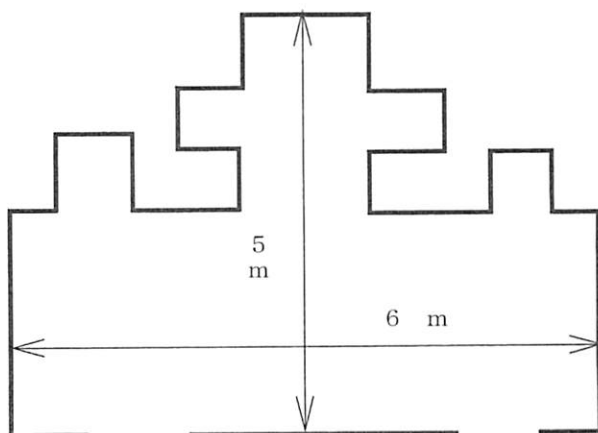
この出口の所は、上の部分が三角形になっており、当時は狭く這って出入りしていたという。

ここから、国道十号線方向の様子を見ていたそうだと。天井からの高さは一メートル弱だったという。



この海軍壕（高野家側）の入口の左手には、民間壕と呼ばれている大きな壕がある。

トーチカの入口左側一メートルの所にある。最長の所は、縦横共に五メートル以上ある。



トーチカ入口横の高野家の民間壕

佐伯海軍航空隊、防備隊については「佐伯市史」や追体験「佐伯と海軍」、「佐伯海軍航空隊兵舎保存を求める声」などの書籍冊子で調べることができる。

それによると、佐伯航空隊は昭和六年八月に航空隊設置が決定し、三年の工期を経て昭和九年二月に完成している。長さ八七五メートルの陸上飛行場や、長さ一七〇メートルの水上機用滑空台などが作られた。

航空機による豊後水道の警備や哨戒、艦船の出入り援護に当たっていた。範囲は、現在の野岡、鶴谷、長島、東、女島、新女島、中江の一带であった。

また、真珠湾攻撃のため昭和十六年十一月、機動部隊が佐伯湾に集結し出撃したと言われている。

佐伯防備隊は、昭和十五年二月に開隊された。広島の大田守府に所属し、駆潜艇を中心に豊後水道の警備や哨戒、艦船の出入り援護に従事していた。

一航空隊と防備隊は、昭和二十年四月以降の空襲により被弾し、防備隊は五月十三日に全焼している。

この間、多くの人々がこの地で訓練し出撃、あるいは空襲等により被災している。

空襲の最大のもの、昭和二十年四月二十六日、アメリカ

カ第七十三爆撃機二十三機によるものである。

七〇発の爆弾（一部時限式爆弾）が投下され、城山山頂の毛利神社、佐伯中学（現鶴城高等学校）、市内馬場区の防空壕等が被害を受け、多くの人が亡くなった。

昭和二十年三月十八日にも、床木岡田地区の民家に爆弾が落ち二名の人がなくなっている。

他に切畑久土に爆弾が落ちたともいう。

このような海軍壕や民間壕は、まだまだ各地に残されている。これらの遺産をどのように保持し、後世に伝えていけばよいのが今後の大きな課題である。

この海軍壕について調べていくと次々に疑問点や問題点が出てくる。

海軍防備隊医療班、砲術科がいつから来たのか。どのような活動をしていたのか、この壕の働きは何なのか。

壕内の床に書かれた「防」「七」の文字や「圖」「防」と書かれたコンクリート片などは何を意味するのか。

周辺の民間壕の形と大きさ、数の多さなど……。

現在、調査研究中であり不明の部分や不確かな事も多い。皆さんのご意見や情報を是非お寄せ戴きたい。

（編集構成 吉田）